

巻 頭 言

イモ加工品の輸出

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

農業新聞の伝えるところによると、山形県の経済連は、県産果実の海外輸出を試み、昭和60年に柿については加奈陀に、東南アジアに対してはリンゴを輸出した。そして、昨冬にはECのうち西ドイツのジュッセルドルフの農協コーナーで「ふじ」、ブリュッセルのスーパーマーケットで「世界一」を販売してみた。両国のお客とも、日本の大きなリンゴに一様に驚き、現地産の三倍以上の高値がつき、高い評価を得たという。

筆者は、昭和40年から22回、83カ国を視察し、ソ連にも東欧から一回、スカンジナビヤ半島から1回、ソ連だけで3回、都合5回視察したが、その度に、同国の旅行者が網袋にチビたリンゴを詰めて持参しているのを見て、日本の大玉を供給してやったら、どれだけ嬉ぶことだろうと毎回痛感した。それが実現したのだから、快哉を禁じ得ない。

ところで、イモ作振興の一助として、いも加工品の輸出を計画したら、どうだろうか考える。甘藷、馬鈴薯そのものでは、重量の都合上、運賃がカサむので、採算が合わないだろう。もっとも、今年茨城産のメロンは、香港に出荷することにしたというが、こちらはイモ類よりも高級品だから、運賃位のコスト差は回収することに困難をきたすことはないだろうと思うが、イモそのものでは勝負にならないことと思われる。

その意味では、茨城産の乾燥芋、ポテトチップ、けんぴし等の加工品を主体とすることになることと思うが、カップメンが東南アジアであれだけ歓迎され、あんぱんがEC諸国で愛好されているのであるところを見ると、南アフリカ、東南アジアの食糧飢饉に救済の手段を提供することができると思う。

尤も、イモについては、タロイモ、キャッサバ、アルロート等澱粉原料、食糧等の中心となる農作物があるわけだが、東南アジアを越えてアフリカにいたると、饑餓王国だから東南アジアの状況と同じに考えるわけには行かない。そこに供給する方策の一端として検討すべきであると思う。

米食民族だから米でなければダメだという考えが、この何百年、どれほど米食民族を苦しめてきたことか。わが国の天保の飢饉一つを振りかえって見ただけでも思いなかばに過ぎるものがある。その意味では、イルカを捕えてはいけぬ。クジラを捕獲することは禁止する。然し、牛を殺すことは神のみ心になったことだ式のアメリカの思想も排斥されなければならない。

いも類消費拡大推進に鑑み、いも類の加工技術共進会等を開催して、一大キャンペーンを実施し、序でに、わが国のいも類加工技術の一大進歩を促す必要があるのではないだろうか。切に実現に移すことを望みたい。